

令和六年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限

国 語

(その一)

注意 解答欄は問題用紙の(その六)・(その七)にあります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が「生命誌」を始めたきっかけは、括弧^{かっこ}つきの「生命科学」に疑問を感じたからでした。そこでまず、生命科学誕生の経緯^{けいゐ}を見ておきます。

時代は一九七〇年に戻^{もど}ります。この一九七〇年という年に、日本で生命科学^①、米国でライフサイエンス^②が登場しました。多くの方はこの二つの言葉は同じ内容と思い、生命科学はライフサイエンスの訳だと思っていらいっしやるのではないでしょうか。実は、この二つはそれぞれ独立したものとして、偶然^{ぐうぜん}にも同じ年に生まれたのです。

しかしこの二つには共通するところがあります。それは「人間」を研究対象としていることです。それまで生きものの研究は「生物学」と呼ばれてきました。大学の生物学科は植物学と動物学に大別^⑦され、他に微生物^{びせいぶつ}などさまざまな生きものが研究されていましたが、その中に人間は含まれていませんでした。人間を研究するのは人類学^{じんるいがく}や心理学であり、これらの学科はほとんど文学部に所属していました。もう一つ、人間を対象にするのは医学ですが、これは人間そのものを知るというより、病気を知り治療^{ちりようほう}法^{ほう}を考えることを目的としています。

A、私の恩師である江上不二夫^{えがみふじお}先生が考え出した「生命科学」は、生物学を、人間を対象とするものに変えようという大胆^{だいたん}な、そして今振り返^ふるとセンケンセイ^④の高い発想から生まれたものでした。ここで展開された問いは、「生命とはなにか」です。

それまでの生物学では、カエルの卵からオタマジャクシが生まれる様子、コウモリの生態、アリの社会、アサガオのヘンシユ^⑨などさまざまな生物を対象にさまざまな現象を調べる研究が行なわれていました。それらはまったく独立して行なわれ、研究者がお互^{たが}いに関係を持つことはありませんでした。しかしここにいたってようやく種々の生物を総合的な視点で見ながら、「生命とはなにか」を問う学問が現われたのです。その土壌^{どじよう}となったのは、言うまでもなく、一九五〇年代に始まったDNA研究でした。DNA研究は、大腸菌^{だいちょうきん}でもゾウでもさらには人間でも、「生命現象の基本は同じである」ということを示したのです。現代生物学の一大テンキ^⑤を、一九五〇年代におけるDNAの二重らせん構造の発見に置くことに、異論のある人はないと思います。地球上の生きものすべては細胞^{さいぼう}から成り、そこには必ずDNAがあること、それが「生きている」という生物すべてに共通の現象を支える基本物質であることが解明されていった経過はここで改めて述べません。

DNAというتماز「遺伝子」として、ある性質を決めてしまうものとしてのみ受けとめられがちですが、生物学においてDNAが重要だったポイントはそこではありませんでした。一九五三年に発見されたDNAの二重らせん構造は、何よりもそれ自体が「生きものの持つ特徴^{とくちゆう}」をすべて備えているという点で研究者を惹^ひきつけたのです。つまり、自分と同じものをフクセイしてふやしていく(これはネコの子はネコ、イヌの子はイヌという意味でのマクロな意味でもあり、体の中で筋肉の細胞になったものは同じ筋肉の細胞としてふえていくというミクロな意味でもあります)という性質、体に必要なタンパク質をつくる情報を持つということ、基本的には同じものとしてふえながら時に変化をして進化していくという性質などです。そしてこの「DNAの持つ情報のもとに作られたさまざまなタンパク質がはたらいっている」という状態がまさに「生きている」ということの具体的な姿なのです。つまり、DNA^④に基づくこの営みを見る限り、「生きている」という現象じたいはどのような生きものでも同じであり、大腸菌もゾウも人間も、同じ土俵の上で語れることがわかったのです。

この作業は、あらゆる生きものの中で行なわれています。B、この作業が行なえない場合、生きものは生きることができません。この作業はじつさいにはとても複雑で、私たち人間の場合でしたら、二万三〇〇〇種ほどの遺伝子がはたらいて多様なタンパク質がいつ、どこで、どれだけの量つくられるかというところから始まり、それらがお互いに関連し合いながらどの

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国 語 (その二)

ようにはたらくかということまですべて制御せいぎよされていなければ、今ここで生きていることはできません。日常的にはもちろんこの様子は目に見えず、私たちは自分の体の中でたくさんの方たちが絶え間なくつくられたり、はたいたり、壊こわされたりしていることなど考えもせずに暮らしています。しかし生きものはすべてバクテリアも昆虫こんちゅうも植物もこれだけのことをやっているわけで、それだけです！と思わざるを得ません。

こうしたDNA研究の進展により、すべての生きものに共通な現象、「生きている」とはどういうことを具体的に知ることができるようになりました。しかしこの意識を持ったのは、生物学者のなかでもDNAのはたらきを基に生きものを見ている分子生物学者だけであり、多くの生物学者は従来の個別研究にこだわっていました。そこで江上は、「生命科学」という新しい言葉をつくって、生物研究の新しい方向を打ち出したのです。

このように考えると、これまで生物学の対象とならなかった人間もまったく同じ問いの対象になることがわかり、生命科学では人間を知ることにも研究目的になります。正確に言うと、地球上の他の生きものすべてとつながっている生きものとしてのヒトを知ることが目的に入ります。そして、その知識④を基にして人間について考え、さらには人間の生き方を考えようということになります。社会をつくり、文化・文明を持つ人間について人類学や心理学だけでなく、哲学てっかく・社会学なども

C

して理解していききたいと考えたのが生命科学の始まりです。

(中村桂子『科学者が人間であること』)

問一 波線部㉞㉟のうち、漢字は読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

- ㉞ 大別 ㉟ センケンセイ ㊱ ヘンシュ ㊲ テンキ ㊳ 基(づく)

問二 本文中のA・Bに入る適当な言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはなりません。

- ア 逆に言うなら イ 話は変わりますが ウ こういうわけで エ これに対して オ それに加えて

問三 傍線部①「生命科学」とあるが、これはどんな学問か。本文中から三十五字以内で書き抜きなさい。(句読点、符号なども字数に数えます。以下同じ。)

問四 傍線部①「生命科学」と傍線部②「ライフサイエンス」の共通点は何か。それを説明している一文を見つけてはじめての五文字を書き抜きなさい。

問五 傍線部③「『生きている』という生物すべてに共通の現象」とあるが、どういう現象か。四十五字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「その知識」とあるが、どのような知識か。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問七 本文中のCに入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 独立 イ 依存 ウ 協働 エ 分散

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国 語 (その二)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(僕(コペル)は、学校に來なくなった友人の優人(ユージン)の元を訪ねた。)

杉原^{すぎはら}先生のことを考えると、いつもバックには太陽が明るく照りつけている、ってイメージが浮^うかぶ。若くて元気がよくて、いつも創意工夫とやる気にあふれていた、青春学園ドラマの主人公になりそうな先生だった。ちようど学校が郊外^{こうがい}にあったから、僕^{ぼく}たちは大^{おお}風を作^{つく}って上げたり、近くの川で水車を作^{つく}ったりしたものだ。そういうことを企画^{きかく}し、先頭に立^たって指導^{しうど}していたのはいつも杉原先生だった。⑦ネツゲツカンであるあまり、我が道^{みち}を突^つつ走るきらいはあ^あったけれど、意地の悪いところなんかはなかった。それは誓^{ちか}ってもいい。

そんな杉原先生が、いったいユージンに対して何をしたというのか。

「……小さい頃^{ころ}、ニワトリを飼^かってたんだ」

ユージンはそう呟^{つぶや}いた。その瞬間^{しゆんかん}、僕は、あ^あつと思^{おも}った。

そのニワトリのことなら、僕も知^しっている。ユージンがヒヨコのころから飼^かっていた、コッコちゃんだ。正確に言^いうと、ヒヨコになる前から飼^かっていた。有^あ精卵^{しゆらん}で買^かってきたのを、誰^{だれ}かから、それを温^ぬめたらヒヨコが生まれる^うって聞^きいて、電球やら湯たんぽやらときには自分の下着^{したぎ}の間に入^いれたりして、ユージンは苦心^{くしん}慘^{さん}憊^{たい}して温^ぬめ、本^{ほん}当^たに孵^{かえ}ったヒヨコだったんだ。

「……僕も覚^{おぼ}えてるよ」

今までどこかで、見^みないよう^{よう}にしていたもの、とりあえずカッコに括^{くく}って横^{よこ}に置^おいていたもの、その場所^{ばしょ}を今^{いま}まさにユージンが指^さし示^しした氣^きがした。

「杉原は僕のこと、嫌^{きら}いだっ^たんだよ、ほんと^{ほん}とは」

え？ と僕は過去^{かこ}のいろんな場^ば面^{めん}を思^{おも}い出^でそう^{そう}としたけれど、思^{おも}い当^{あた}ることはな^なかった。……コッコちゃんのこと以外^{いそ}は。

「氣^きのせいじゃないのか」

ユージンは激^{げき}しく首^{くび}を振^ふった。

「氣^きのせいじゃない。僕^{ぼく}みたい^{たい}にいちいちうじ考^くえ込^こむタイプは、Aに受^こけ付^けけないんだ、あいつは」

「でも、それを言^いうなら、僕^{ぼく}だ^って」

いちいち考^くえ込^こむタイプ、というなら人^{ひと}後^ごに落^おちるものではない、と自^み負^なしている。

「コペルはまだ、可愛^{かわい}げみたい^{たい}ながある^あるんだよ。皆^{みな}に、愛^{あい}すべきや^やつ、^つて思^{おも}われるような」

なんだよ、それ。僕はむ^むつとした。

「意識^{いしき}して媚^こびてたつもり^りなんかないけど」

「媚^こびるとか媚^こびないとかの問題^{もんだい}じゃないんだよ。生ま^うれつ^ついてのものなんだ」

そんなふう^{ふう}に言^いわれたら、反論^{はんろん}のし^しようがない^{ない}じゃないか。

「だからき^きつと、軍^{いくさ}隊^{たい}に入^いったとしてもうま^まく生^なき抜^ぬいてい^いけるよ」

ここでもう、ちよ^ちつと相^あ当^た力^{りき}カチンとき^きたけど、ユージンが次^{つぎ}に、

「でも僕^{ぼく}は無^む理^りだ^な」

つて言^いったとき、ああ、そう^{そう}だ、ユージンには絶^{ぜつ}對^{たい}無^む理^りだ、と素^す直^{ちき}に思^{おも}えた。それと較^{くら}べれば、自分のほう^{ほう}がまだ、そんなところでも適^{てき}応^{おう}力^{りき}があり^ありそう^{そう}な氣^きがした。なんて言^いう^うんだらう。ある種^{しゆ}の鈍^{にぶ}さか。Bつて言^いう^うんだらうか。いや、違^{ちが}う。でもこれ^{これ}については後^{あと}日^{にち}改^かめ^めてまた考^くえることにしよう。

令和六年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限

国 語

(その四)

「……おやじとおふくろの離婚りこんがいよいよ決定的になったとき、最初おふくろは僕と妹を連れて出て行くつもりだったんだ。持っていくもの、置いていくもの、考えているうちに、ニワトリをどうしよう、つてことになった。あんな、うるさく関かをつくるオンドリなんか、町中のマンションには連れていけない。そうだ、学校で飼かつてる動物の仲間にももらえたらと思いついた。僕もそれなら毎日会えるし、いいか、と思った。それでおふくろが学校へ連絡れんらくした。校長は二つ返事でオーケーした。おふくろは僕に、ニワトリを学校へ持って行かせた」

そのときのこと覚えてる。

(中 略)

これは、ユージンが、自分自身の記憶きおくからサイコウセイサイコウセイして語った、「そのとき何が起こったか」だ。

「ニワトリを玄関の横につないで、職員室に行ったら、杉原がいたんで、コッコを連れてきました、つて言ったんだ。え？と最初はわけが分かんない様子だったけど、僕が、学校で……と言いかけたら、ああ、分かった、君が飼かつてたニワトリを学校がもらうことになったんだな、と、領うなずいた。考えればその言い方が、すでに少しずれていた。でも間違まちがいじゃないから、そうです、つて返事すると、じゃあ、預かつとくから、君、教室に入いってなさい、つて言われた。その通りにした。そうしたら、朝の職員会議が終わって、教室に入いってきた杉原は、いきなり、『今日の総合学習では、食べ物がどこから来るかということ勉強べんきやうしたいと思う。たとえばトリ肉は、最初からパックに入いっているわけではない……』つて言い出した。いやな予感がした。『今、そこにある命が、自分の命を支えてくれる、自分の血や肉になるという体験たいけんしてもらいたいと思う。昔、家で飼かっているニワトリをつぶして食べるつていうことは、ごく普通ふつうのことだった。だからこそ、食べ物にも自然と感謝かんしゃの気持ちきもちが湧わいたんだ。先生は以前から君たちにもそういう体験たいけんしてもらいたいと思つていたんだ。命が繋つながつていく、というこことを。ちょうど今日、優人が自宅で飼かえなくなったニワトリを持もつてきてくれた。もし、優人が許ゆるしてくれたらだけれど、つぶして、料理する、つてことをやってみないか』。血の気が引ひくつて、ああいうときのことを言うんだろうな。杉原は自分の『斬新ざんしんで本質ほんしつをついた教育』に興奮きふんして目がきらきらしていた。みんなも、ええーつて言いながら、退屈たいくつな授業が、なんかとてつもなく **C** なものに変わり、ふだんはタブーそのものの、『殺し』の場に居い合わせられるつていう、非日常的な事態じたいに動揺どうりやうし、それを、僕ははつきりと断言するけど、『興奮きふんして楽しんでた』。コペル、おまえもそうだったはず。いや。責めてるんじゃないよ。そのことを認めてほしいとは思つてるけど。

とにかく、僕は、みんなのためにニワトリを教材として提出すべきだと期待されていた。クラス中の無言の圧力を感じた。僕は、教材にするためにニワトリを飼かつていたんじゃない。

その一言が、どうしても言えなかった。僕がずっと黙もくっているの、杉原は苛々いらいらした。

『さつき、優人のお母さんに連絡したら、そういうことならニワトリも本望ほんぼうでしようつて言つてらしたぞ』杉原のその一言がクラスのムードに追い打ちをかけた。僕は、それで、僕は、とうとう最後に領うなずいたんだ。自分の気持ちとは関係なく、体がそう動いたんだ。自分でないみたいだった

そうだ、僕も覚えてる。え？ え？ つて驚おどろいているうちに、ことはどんどん進んでいった。いやだ、やめてほしい、と泣き出す女の子もいたつつけ。でも、ユージンはただ黙もくっていた。いいのかよ、いいのかよ、と僕は半信半疑でそこにいた。

X を唱のえようにも、杉原先生の言い分は、いかにも **Y** になつていいるような気がした。ただ、どこか、何かを無視ししたような強引きやういんさで進んでいく気がしたけど、どこがおかしい、というのを指摘してきするだけの力が僕にはなかった。「何かがおかしい」つて、「違和感いわかん」を覚おぼえる力、「引ひっ掛かかり」に意識いしきのスポットライトを当てる力が、なかったんだ。「正論風」にとうとうと述べられると、途中とちゆうで判断能力が麻痺まひしてしまう癖くせもあった。

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国 語

(その五)

けれど、ユージンが自分なりの判断でそうするというのなら、それはそれですごい自己犠牲じこぎせいのように思えたし、また、あ
あいうことって、「本当に大切な、知っておかなければならないこと」のような気もしたのも事実だ。「^④命が繋がっていくこ
と」なんて言われると。

(梨木香歩なしきかほ『僕は、そして僕たちはどう生きるか』)

問一 波線部㊦㊧のうち、漢字は読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

㊦ ネットケツカン ㊧ 人後 ㊨ 自負 ㊩ サイコウセイ ㊪ 本望

問二 本文中のA・B・Cに入る適当な言葉を次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。
ただし、同じ記号を繰り返し用いてはなりません。

ア 段階的 イ 生理的 ウ 刺激しげき的 エ 健康的 オ 画一的

問三 本文中のX・Yに入る漢字一文字をそれぞれ答えなさい。

問四 傍線部①「すでに少しずれていた」とあるが、優人と杉原の間で、どのような点がずれているのか答えなさい。

問五 傍線部②「自分の気持ちとは関係なく、体がそう動いたんだ」とあるが、その理由を八十字以内で答えなさい。

問六 傍線部③「何かを無視したような強引さ」とあるが、「何か」とはどのようなことだと考えられるのか答えなさい。

問七 傍線部④「命が繋がっていくこと」とは、どういうことか。「くこと。」に続く形で本文中から三十五字以内で書き抜
きなさい。